

3

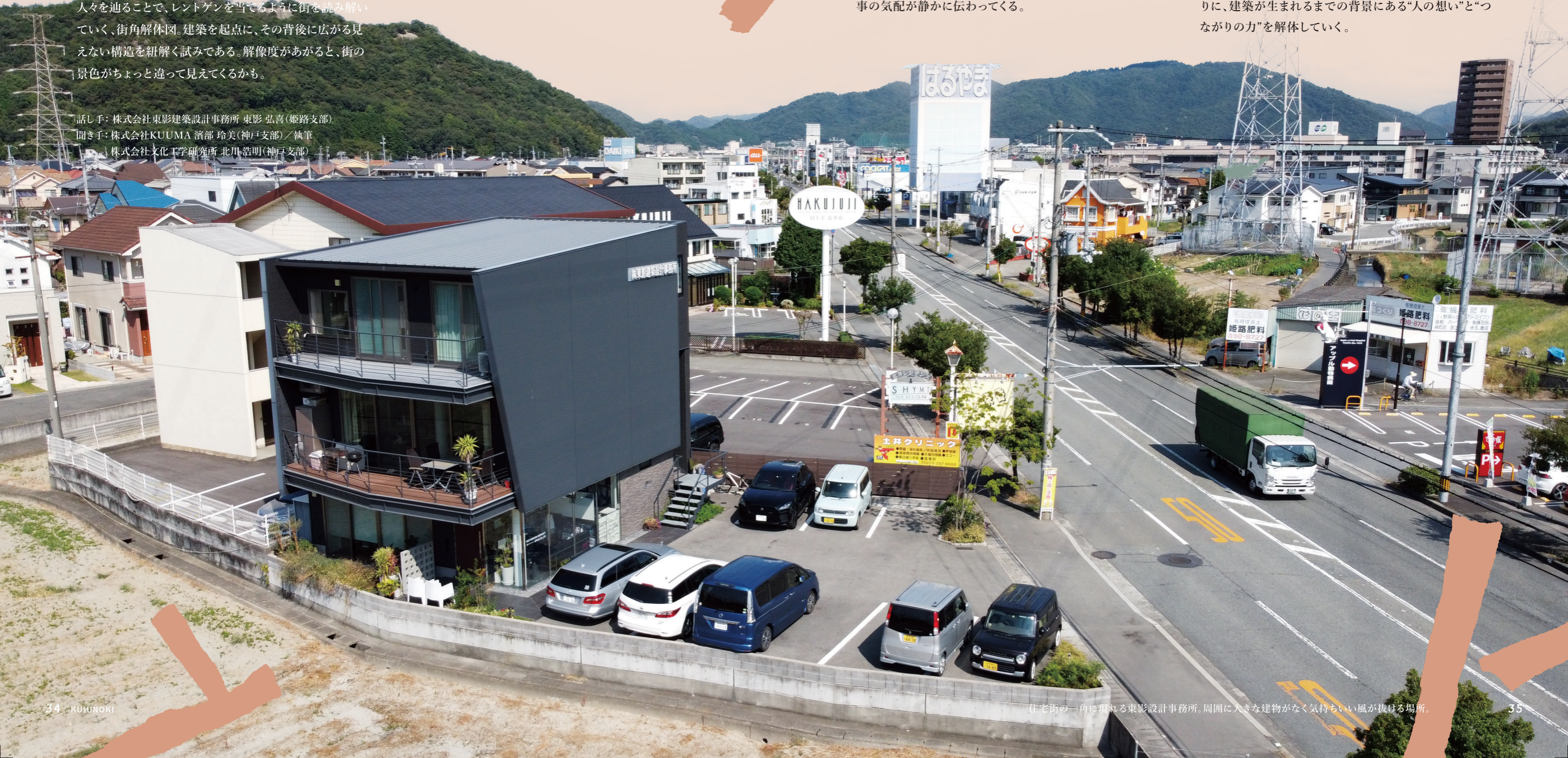
普段何気なく目にしている、建築物やそれらがつくりだす街の景色。それらは、どのように今ここに存在するに至ったのだろうか。背景にある風土や歴史、構造、そして関わる人々を迎えることで、レントゲンを当てるように街を読み解いていく、街角解体図。建築を起点に、その背後に広がる見えない構造を紐解く試みである。解像度があがると、街の景色がちょっと違って見えてくるかも。

話し手: 株式会社東影建築設計事務所 東影 弘喜(姫路支部)
聞き手: 株式会社KUUMA 濱部 玲美(神戸支部) / 執筆
株式会社文化工学研究所 北川 浩明(神戸支部)

25年前、三畳一間から幕をあけた 人のあいだに立ち上がる建築

姫路市内の住宅地の一角。辻井のバス停を降りてほどなく見えてくるのが、東影建築設計事務所の自社ビルだ。10年前に竣工したこの建築は、丁寧に手入れされた植栽や開かれた佇まいから、日々ここで営まれている仕事の気配が静かに伝わってくる。

この一棟の建築には、設計者個人の思想だけでなく、家族、スタッフ、職人、メーカー、そして建築士事務所協会を通じて培われてきた人と人との関係性が折り重なっている。今回、東影建築設計事務所の自社ビルを手がかりに、建築が生まれるまでの背景にある“人の想い”と“つながりの力”を解体していく。



関係性によって描かれる設計図が 建築を形作っていく

東影建築設計事務所の事務所空間は、ワンフロアで構成されている。社長席もパーテーションで緩やかに区切られているだけで、スタッフ全員の様子が自然と視界に入るつくりだ。出来るだけ全部が見渡せるようにしたほうが、スタッフが会社のことを分かりやすく動きやすいのではという想いから現在のプランに至ったと話してくれたのは、株式会社東影建築設計事務所の代表である東影弘喜さん。

この空間構成は効率やデザインの選択だけで生まれたものではない。スタッフとの距離感や情報の共有、日々の意思決定のあり方といった、人との関係性を前提にした判断の積み重ねによって導かれたものなのだろう。

建物の一角からは、遠くに姫路城を望むことができる。窓の位置や高さも、何度も検討を重ねた結果だ。設計プランは東影さん一人で完結したものではなく、経理を担い経営面でもパートナーとして支えてきた奥様、そして当時在籍していたスタッフとともに意見を交わしながら、少しずつ形にしていっていったのだという。

建築は図面上の合理性だけでは成立しない。誰とどのような関係性のなかで使われていくのか。この自社ビルには、そんな設計図には描かれない条件が静かに織り込まれているのだ。

三畳一間で始まった 駆け出し事務所の汗と図面

2001年、35歳の頃に独立した東影さん。父母からの提案で、実家の三畳一間に事務所を作り、東影建築設計事務所としての狼煙をあげた。

小さな事務所のなかに、置かれた机と椅子、そしてパソコン。コピー機を購入する余裕はなく、図面を出力するために近所のスーパーまで走る日々が続いた。後に中古のコピー機を手に入れたものの、稼働音と発熱で、夏場のエアコン無しの事務所内は一気に室温が上がったという。

「夏場は、汗水流しながら図面書いてたのを思い出しますわ」。そう笑いながら、ときに遠い記憶を思い返し目頭をおさえる東影さんの語り口からは悲壮感は感じられない。そこにあるのは、父親への感謝と、自身ができることに向き合い続けてきた自信だ。

独立から半年ほど経った頃、知人を介して福祉法人から老人ホーム設計の相談が舞い込む。「僕だけの力じゃなくて、みんなに助けってもらって今がある、そんな感じです」。三畳一間の事務所で磨いてきたのは、設計技術だけではない。一人では建築はつくれないうことを、身体を通して実感していったのではないだろうか。

作る楽しさを原体験に 異色の経歴を磨いた若手時代

現在60歳である東影さんの経歴は、いわゆる建築一筋とは異なる。中学の技術家庭科で椅子を作った経験から“つくること”への関心はあったものの、高校卒業後はパイロットを目指し沖縄で航空自衛隊員として勤務。その後、沖縄で寝具販売の営業職を経験した後、父母からの帰郷の要望もあり地元・姫路に戻り、医薬品販売会社の営業職に就いた。当時の営業成績はトップクラス。



母親による毛筆文字で書かれた創業時の事務所看板

「営業は、好きなんですよ」と話す笑顔に、魅了された顧客が多かったことを想像させる。相手の話をよく聞き、関係性を丁寧に育てていく姿勢は、後の建築士としての仕事にも通じるものだろう。



事務所家具もスタッフ総出で一緒に組み立てて作ったそう。現在6名のスタッフが在籍

一方で“つくること”が好きだという気持ちから離れられず、再び建築への思いが強くなっていく。経験も資格もない状態ながら工務店に入り、現場で学びながら独学で勉強を重ね、二級、そして一級建築士の資格を取得した。

技術は後から身につくけれど、人との付き合い方は若い頃の経験があっこそなのかもしれない。異分野で培った人と向き合う感覚は、仕事を円滑に進めるための潤滑油であると同時に、信頼関係を築くための土台となったのだろう。設計者としての判断や提案は、技術だけでなく、誰とどのような関係性を築いてきたかによっても形づくられていく。その意味で東影さんの異色の経歴は、つながりを大切にする建築士としての重要な資産だったのだろう。

一棟の建築に集まった 人と技術の名前

2016年12月、東影建築設計事務所の自社ビルは竣工した。その建設にあたり、東影さんは10年前の発注先リストを今も大切に保管している。そこに並ぶのは、姫路を中心とした地域の職人や企業、メーカーの名前だ。

建築は、完成して終わりではない。建物を使い続けて

いくなかで、補修や改修の相談が必要になる場面は必ず訪れる。そのときに、誰が、どのような関わり方で建築に携わったのかが分かることは、建築士にとっても、建物の使い手にとっても重要な意味を持つのだ。東影さんは、自身が手がけるプロジェクトでも、同様に発注先や関係者のリストを残しているという。

それは単なる記録ではなく、建築に関わった人々との関係を引き受け続ける覚悟の表れでもある。建築士事務所は、何かあった時にも安心して頼れる、街の駆け込み寺のような存在なのかもしれない。

自社ビルの外壁に採用されたのは、ニチハ株式会社の窯業系サイディングと金属製サイディングだ。防汚性や耐候性といった性能面に加え「自分のプロジェクトでも使ってみよう」という設計者としての関心もあった。採用の決め手となったのは、製品スペックだけではなく、担当営業の誠実な姿勢や、対話を重ねるなかで築かれた信頼関係だった。



自社ビルの外壁にはニチハのサイディングを含め3つの素材を組み合わせて設計

この自社ビルには、設計者の意図とともに、多くの人の技術や思いが折り重なっている。一棟の建築は、完成した“モノ”であると同時に、人と人との関係が集積したつながりの結節点でもあるのかもしれない。

建築士事務所協会という “見えないインフラ”

建築士として独立し、事務所を構えるようになってから、東影さんは兵庫県建築士事務所協会に所属してきた。姫路支部を中心に、同じ立場で事務所を営む建築士たちと顔を合わせるなかで、仕事の技術とは異なる学びがあったという。

「情報も日々更新されて日進月歩でしょ。人間一人で出来ることはしれてるからね、勉強させてもらってます」。

協会で行われるのは、表に出ることの少ない実務の話や、業界の空気感だ。資材の供給状況、法制度の運用、現場で起きている細かな変化。そうした一般には出回らない情報は、インターネットや資料だけでは十分にすくいきれない。多くの情報に溢れている今の時代、本当に知りたい情報は自分でつながった人たちのなかにあるのかもしれない。

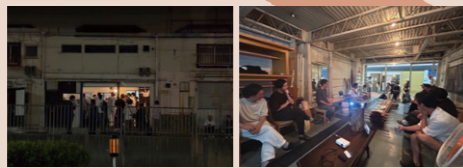
「懇親会とかで話したら、『あ、それ、今ちょっと入らんで』とか『半年待ちやな』とか、ほろっと出てくることあるでしょ。ああいうのはつながってへんと分からんですから」。ハイテンションボルトの入手難や、鉄骨の納期といった具体的な話題も、協会内の会話から知ることができた。自社ビルに関わってくれた多くのメーカーとの出会いも協会内での賛助会員との交流の場であったことをまた振り返る。即座に仕事に結びつく情報というよりも、設計や工程を判断するための下地となる出会いがそこにあるのだろう。

デジタル化が進み、個々が情報にアクセスしやすくなった一方で、身体をともにする場は減りつつある。そうした時代だからこそ、協会という“顔の見える関係性”が、判断力を支えるインフラとして機能しているのだ。

文化的な交流がひらく 未来の建築

仕事につながる業務だけではない。文化的な交流も大切にしたいと話す東影さん。「仕事の話だけやのうてね、建築のこと、街のこと、なんやったら全然関係ない話でもええんですわ。そういうところから、何か生まれることもあるんちゃうかなって」。印象に残っている出来事として、若手建築家の集まりに参加した経験を挙げた。

「パリのシャンゼリゼ通りのカフェテラスに画家がなんか集まって、お茶飲んだり、お酒飲んだりして、何か生まれていくようなね、ああいう感じに近いなあって思いましたわ」。その



元町駅高架下で週に1度シャッターをあげて活動するKAS (Kobe Architectural Study)の活動風景

場の主催者のひとりが、神戸支部の北川浩明さんだった。北川さんは現在、元町駅高架下の一角で『KAS (Kobe Architectural Study)』という活動を行っている。建築家有志を中心に、地域における建築のあり方を研究・模索するスタディグループで、トークイベントや自主討論会、地域資源の活用に関する研究会などを継続している。

こうした文化的な交流は、すぐに成果が見えるものではない。しかし、建築を取り巻く視野を広げ、次の仕事の種を静かに育てていくものだろう。

見えない関係性が 建築となって残り続けていく

「いつでも笑顔でいなさい」。幼い頃から、母親にそう言われ続けてきたという東影さん。独立当初の厳しい時期も、三畳一間の事務所で汗を流しながら図面を描いていた日々も、その言葉に励まされたことが何度もあった。



東影さんが大切に保管している母からの絵手紙

実家の敷地の一角に事務所を持つことを提案し、静かに見守ってきた父母の存在。経営と設計の両面で伴走してきた奥様。ともに働くスタッフや、地域の職人、メーカーの担当者たち。そして、建築士事務所協会という、顔の見えるネットワーク。感謝の想いで一杯だと話す東影さん。

東影建築設計事務所の自社ビルは、そうした多くの人との関係性のなかで立ち上がってきた。建築は、一人の建築士の才能だけで完結するものではない。人と人のあいだに積み重なった信頼や対話が、空間として結実したものだ。

街角に立つ一棟の建築を解体していくと、そのなかには無数の関係性がはり巡らされていることが見えてくるだろう。そうした見えていない建築の裏側にある構造に光をあててみると、街と人をつなぐ風通しがより一層よくなっていくのかもしれない。

兵庫会活動

- 40- 近畿ブロック大会
- 41- 全国大会(新潟大会)
- 42- 姫路支部ミライ推進委員会第2回イベント
「BIMを介しての将来の設計事務所
の在り方について語る会」レポート